

流水の^{おり}澱



嘉陵江

行く雲は風塵を巻き上げもの悲しく、私は長江と嘉陵江のように流れ、流れ、流れていき、徐々に自分の歳も忘れてしまった。しかし底に沈んだ澱(おり)はまだうごめいている。

私は覚えている、43年前、嘉陵江の傍らの岩の上でしばしの休憩をとっていた私の姿があったことを。北碚を通過して北温泉への曲がりくねった山道に、私の足跡があったことを。姿は見えなくなり足跡もなくなってしまった。しかし脳裏には、断片的ではあるが昔のことがまだはっきりと刻まれている。まるで一幅の墨彩画のように色合いもはっきりとしたままで……。

1938年の夏、私は、故郷から引き離された避難民の一群と共に武漢から長江上流の重慶にたどり着いた。しかし安堵の溜息をついたのも束の間、翌年の春には日本軍の激しい無差別攻撃を受け、はじめに住んでいたところが爆破され、頭に傷を負い、やむなく苦勞を重ねて重慶から200里離れたところにある北碚にたどり着いた。

北碚は重慶にある景勝地のひとつで、舟を雇って嘉陵江を上流にさかのぼることができるし、自動車道があって上清寺、歌樂山、頼家橋、青木関に車で直行できる。抗

日戦争のあいだここは文化活動が盛んで、名高い文人たちが互いに交流していた。復旦大学、育才学校、中山文化館、教科書編集委員会といった多くの文化・教育機関も集まっていた。私は編委会（教育部教科書編集委員会）の編集員として働いていた。

ただ北碚は住宅数に余裕がなく各方面から来る人々が多すぎて、旅館でさえ客が満員になることを心配するほどで、しばらく身を寄せるところがどこにもなかった。ところがあいにく私は肺病を再発していたし、北温泉②には北京風のアパートもあり、療養にも適しいところだと友人から教えられていたので、すぐに親友の文姉さん（楊郁文）を誘って一緒に北温泉に向かい仮住まいをすることにした。

①嘉陵江……陝西省秦嶺山に水源を持つ川。南流して重慶で長江に注ぐ。

②北温泉……1927年に政治家・教育家・実業家の盧作孚（1893－1952）よって開発された温泉で現在も多く観光客が訪れている。盧作孚は長江の民生会社を設立し長江の水運業を担った大実業家で新国家建設に貢献したが、中華人民共和国成立後は官僚資本家と糾弾され、失意のうちに亡くなった。服毒自殺説もある。

抗日戦争の時期の北碚は、後方の重要な文化地区であっただけでなく、重慶の副都として重要なエネルギー供給基地であり、紡績工業基地その他のいくつかの重要な事業試験基地だった。1945年の統計によると、北碚には天府、宝源、華鎣、全濟、復興隆、三才など大小60あまりの炭鉱と石炭専用の港が7か所、石炭貯蔵所130か所、石炭業関係従業員2万人あまり、年間の石炭生産は70万トンあまりだった。

北碚で生産された石炭は嘉陵江の「黄金水路」、南充、達県、遂寧を経て重慶へ、そして長江を通過して江津、瀘州、宜賓、樂山などに届けられた。北碚は重慶地区の兵器・紡織・機械・製錬・海運・電力など1228社の70パーセントの工業用燃料と100万人近くの市民の家庭用燃料の供給を保障する、まさに後方の最重要な石炭生産基地だった。

抗日戦争が勃発した後に、1930年設立の北碚三峡染織工場と内陸部にある常州大成織物工場、漢口隆昌染色工場は合併されて明朝染織有限会社になり、32000平メートルの土地を占有し、工場の部屋は182、設備機械は230台あまりで、独自に開発製造した「大明藍布」は良質で廉価で、西南地区〔四川、雲南、貴州、チベット〕で売れ行きがよかった。

そのほか、西南麻織工業有限会社第三工場、私立協興染織工場、重慶蜀華布工場北碚分工場、北碚黄桷棉織社などがある。抗戦時期、北碚はまた国民政府の地籍整理実験区、自作農支援模範地区および傷痍軍人自治実験区に定められていた。

北温泉は北碚から遠くはなく、嘉陵江に沿って曲がりくねった山道を歩いていくと半時間足らずで到着する。小舟を漕いでいくとたった 20 分だ。北温泉は北碚よりも高いところにあり、実際には小さな山の公園で、後ろには連綿と続く山々があり縉雲山に連なっている。気候は温暖で、川は昔から流れ続けている。そこで人々はこの天然の水源を利用して遊泳池を作った。聞くところによると水質はカルシウムを含み、多くの人が泳ぐときには石灰水を飲み、肺病を予防し治療するという。私はのちにここで水泳を学んで、ついでに石灰水を何口か飲んだ。



ここの景色は大自然の美に満ちている。見事な彫刻の施された東屋(あずまや)などはない。まばらに旅客用の宿が点在しているだけだが、建物はそれぞれ特色があり、名前の付け方も優雅である。特に印象深いのは“数帆楼”と“琴盧”だ。数帆楼は川に面していて、上の階の手すりにもたれて嘉陵江を眺めることができる。琴盧は竹を用いて作られた平屋建ての一並びで青緑のペンキで塗られている。門の前の小道は石畳になっていて、玉砂利が敷かれた曲がった道に通じている。

私と文姉さんは二人とも同時に気に入って、すぐにここに一部屋借りることにした。賃料は高くなかった。自炊ができて、こだわりをもつ中国風、西洋風のレストランもあった。要するに便利で確かにある種の北京風アパートの趣もあった。

私たちが住んだ琴盧の部屋は門の前に回廊があって手すりがあった。前を見ると一面苔むした嵐坡山岩があり下は谷川になっている。竹作りの道に面した家は実際には谷の上に架けられている東屋(あずまや)で、窓枠に寄りかかり山の景色を見て水の音を聞くとまるで別天地にいるようだ。静かで趣があって、特に夜が更けて静かになったとき机に向かってものを書いていると、途切れることなく考えが浮かんできた。あの嵐岩の滝のようにそれを止めることはできなかった。

多くの抗日戦の物語が湧き出てきた。粗削りではあるが、それは生存の消し難い痕跡であり、今から見ればやはり歴史の証拠だ。この期間に私は 5 幕の劇『女傑（重慶華中書籍会社）』を書き、さらに何篇かの 1 幕の劇と散文を書いた。

都合のいいことに、私のすぐ隣に住んでいたのは女流作家の沈櫻と詩人の梁宗岱^③で、琴盧には文人を吸引する力があることがわかる。私と沈櫻は偶然に出会い初対面で意気投合し、昔からの知り合いのように朝に夕に会って大いに寂しさを紛らわすことができた。

私はよくロウソクを灯して明け方まで執筆したので、当然朝に寝入っていたのだが、ちょうどそのときが文姉さんの出勤時間で沈櫻の起床時間だった。彼女たちが私に聞いたことがある。「こんな寂しいところで真夜中に一人で起きていて怖くないの？」私は笑って答えた。「ペンを走らせているだけで怖いことなんか忘れるわよ。」

ほんとうに、あのころはただ抗日救亡のことを思うだけで自分のことなどほとんど考えなかった。それは私だけではない、国を愛する人すべてが同様だった。

③沈櫻(1907-1988)……女性作家。1934年に日本に留学して日本文学を学ぶ。ペンネームの「櫻」は桜に因む(本名は陳瑛)。1935年帰国後、詩人で翻訳家の梁宗岱と結婚。抗日戦期間中は8年間重慶に蟄居していた。1949年からは台湾で高校教師となり退職後はアメリカに移住した。

梁宗岱(1903~1983)……詩人、翻訳家、文学評論家。1924年にフランスに留学し、帰国後は復旦大学などで教鞭をとった。後に沈櫻とは離婚した。

同じように北温泉に来ていた劇作家、陽翰笙^④のことも覚えている。琴盧の前にある家に住んでいた。彼はもともと肺病の療養に来ていたのだが、病氣中でも勤勉に脚本『草莽英雄(在野の英雄)』の構想を暖め創作していた。彼は自分が病人であることを忘れ作家としての責任——ペンで敵と戦うという責任を忘れることができなかった。

私達は民間の戦士を題材に書いていた。それでいつも夕暮れに陽翰笙が散歩しながら琴盧まで来ると、私はいつも彼に四川哥老会^⑤の状況を話してくれと頼んだ。彼はとっても面白く生き生きと話してくれたので、この方面の私の知識が増えた。

④陽翰笙(1902-1993)……脚本家、映画製作者。1938年、軍委員会政治部第三庁主任秘書に就任し、周恩来の助手的な存在として働いた。しかし文革時には冤罪で9年間投獄された。

⑤四川哥老会……四川で生まれた反体制秘密結社。辛亥革命に重要な役割を果たした。

1940年の春の初めごろ、私と沈櫻は北碚でバスの停留所脇の新築アパートの二階分を借りた。彼女が三階に、私と文姉さんが二階に住んだ。私たちはみんな北温泉を離れたくなかったが、勤めるにはあまり便利ではなく、文姉さんは毎日長い道を歩かな

ければならなかった。私はあまり出勤しなかったので編集委員会の上司に批判され、そのあときっぱりと辞職した。北碚に移ったあとも、私は一人であるいは友人を伴ってたびたび北温泉に遊びに行った。その年の6月、私は郭沫若、田漢、応雲衛、左明⑥たちと北温泉に遊びに行き、育才学校を訪問した。校長の陶行知先生⑦が参観に招待してくれたからだ。

育才学校を出ると私たちは縉雲寺に登った。階段を一段一段上がった。千尺（約330メートル）足らずだったが私たちは一度も休憩をとらずに一気に登った。あの時私はやっと二十五、六歳になったばかりだった。

縉雲寺の廟はかなり大きくて、名僧太虚和尚⑧がここに仏教学院を開いた。学生はすべて小さい和尚さんで、経典の授業以外に普通の教科も教え、学生の教養を充実させていた。教師はすべて僧侶で一定の教養があり、かなり開けた考え方をされていて、少しばかり在家僧侶の雰囲気を持っていた。彼らはいつも、旅客の中の高名な人物に仏教学院で講演をしてくれるように頼んでいた。彼らはこのことをユーモラスに「布施を請う」と言っていた。金銀や金銭の布施を求めるのではなく、文化と知識を布施として求めるというわけだ。

⑥郭沫若(1892-1978)、田漢(1898-1968)、応雲衛(1904-1967)、左明(1902-1941)は左翼の文学家として抗日戦で宣伝活動に従事した。中華人民共和国成立後、文革時に田漢は逮捕されて獄中死し、応雲衛は紅衛兵の暴行を受け惨殺された。

⑦陶行知(1891-1946)、教育家。1939年に重慶で育才学校を創設し、1946年に重慶社会大学を創設した。

⑧太虚和尚(釋太虚)(1890-1947)……僧侶、哲學家。中国の仏教改革指導者。清末改革派の著作に感銘して仏教救国を志し革命派とも交流し、1912年南京に中国仏教協進会を組織した。



当時交流していた文学者たち。右から三番目が趙清閣。

その日は郭沫若が「布施」として数十分の講演をした。抗敵救国の理由の宣伝をしているようではあるが巧みに仏が説く大悲の真の意義と結びつけた。このため聴衆はみな感動した表情をしていた！ 私は郭沫若の弁舌の才能に敬服し心の中で思った。これはまちがいなく、郭沫若が国家のためにといいて和尚に供えたお布施だ！

まず郭沫若が私達に精進料理を「布施」してくれ、それから和尚が私達を食事に招いて山の特産品の甜茶をくれた。私達はお茶を賞味して詩を吟じて、思う存分楽しんで山を下りた。郭沫若と田漢はそのあと、このときの縉雲寺の遊覧の詩を記述していて、それぞれの詩を一つずつの掛け軸にして私にくれた。（「文革」の時に幸いにも難を逃れ、今もそばに秘蔵している。）

すぐに私はまた王瑩^⑨、謝和庚^⑩と北温泉に泳ぎに行き、昔住んだ琴盧に数日滞在し、縉雲寺にも行った。そこの管主の法舫は文芸愛好家だったので特に文人を歓迎してくれた。彼は気楽に私たちと一緒に記念写真におさまってくれた。

⑨王瑩(1913-1974)……中国の代表的女優で脚本家、作家、歌手として活躍した。女優時代の江青(毛沢東の妻)からライバル視され嫉妬されていたため、文革時には反乱分子というレッテルを貼られ投獄され1974年に獄中死した。

⑩謝和庚(1912-2005)……王瑩の夫。抗日戦が緊迫してきたときに中国共産党の「逼蔣抗日(蒋介石を倒し抗日を果たす)」作戦で工作活動に従事。文革時の1967年に王瑩と共に逮捕され10年間投獄された。

1942年の真夏、林語堂^⑪が縉雲寺に避暑に来て小説を書いていた。ある日彼は私と数人の文芸界の友人、老舍、方令孺^⑫、梁実秋^⑬などを招き精進料理をごちそうしてくれて法舫も招いた。法舫は私たちと一緒に談笑した。林語堂は法舫を現代の新僧侶だとからかった。「もし袈裟を脱いだら彼が和尚だと信じられないだろう、どうしてかというとな彼は口を開くと『南無阿弥陀仏』と言い、手を合わせて合掌するというような、普通の和尚のような習慣がないからだ。」

法舫が私に言ったことがある。心はすなわち仏で、彼は心の中で国家民族の災難のために祈っている。抗戦に従軍することはないが決して売国奴にはならない。彼が外国に逃げることはない、彼は林語堂よりも国を愛している。私に太虚は「政治和尚」だと言った者がいるが、私にはそう言った意味がわからない。法師は確かに国家の大事に関心を持ち、正義感があることを知っている。しかしこのような和尚は、封建的な迷信を信じる勢力が強く支配している旧社会にあっては理解されないのだ。それで彼は黙って縉雲寺を去り、聞くところによると海南島に修行にいったそうだ。

⑪林語堂(1895-1976)……作家、言語学者。文芸誌『論語』をして多くの作家に作品発表の場を提供した。

⑫方令孺(1897-1976)……散文作家、詩人。1923年アメリカに留学。帰国後青島大学や復旦大学で教職に就いたが、このときに聴講生であった江青(毛沢東の妻)を指

導したことが原因で文革時には強制労働をさせられた。江青は自分の過去の醜聞を知っている者をすべてこのときに抹殺しようと図った。

⑬梁実秋(1903-1987)……文学者、文芸評論家、翻訳家、辞書編集者。1949年に台湾に移住。台湾師範大学の英語教授となった。

私と沈櫻は北碚で二年ちかく隣同士に住んでいた。当時彼女の長女思薇(スーウェイ)は六、七歳で、活発な女の子だった。彼女が三階で縄跳びをすると天井の石灰の屑が私の髪の毛に落ちてきたり原稿用紙の上に落ちてきたりした。だが私が窓のところから上に向かって叫ぶと、彼女はすぐに素直に抜き足差し足で下に降りてきた、彼女の母親が叱ってもきかないのに。それで沈櫻は彼女が私を怖がっていると思って、彼女がいたずらをするたびにこう言って怒った。「趙お婆さんが来るわよ！」

「このやり方には賛成しないわね。私と子供の間の感情を損なうじゃない」と言うと、沈櫻は笑った。

(去年、遠くアメリカにいる沈櫻との手紙のやりとりの中でこの話が持ち上がり、彼女がこう書いていた。「40年来、思薇は中国にいる私の旧友についてその名前は覚えているが、その人がどんな様子だったかという印象は持っていない。ただ趙お婆さんのことはとてもよく憶えている。')(当時の思薇は私が「怖かった」から私を忘れていないのがわかる。思薇は女性科学者として仕事をしている、と言った。さらに、今年帰国した時には私に会いに上海に来てくれる、とも言った。これは何と嬉しく慰めになる知らせであることか。私は首を長くして待ち望んでいる！)

私の近くに住んでいた友人には方令孺、梁実秋、趙太侔、俞珊、朱双雲、田禽⑭たちがいて、みんな編集館で仕事をしていた。私は書くのが専門でこの時期には何篇かの数幕劇用脚本を書いた。『生死恋(商務印書館)』『活(婦女出版社)』『瀟湘淑女(商務出版)』『此恨綿綿(正言出版社)』……等。さらに何篇か的一幕劇用脚本と散文、演劇理論を書いた。

仕事量はとても多くて、そのため肺病が再発し虫垂炎にもかかった。これに加えて三日に二度、時には一日に何度も日本軍の空爆があった。急いで防空壕に走り、心身ともに緊張し疲れ果てた。友達も同じような状況だった。ふだんはほとんど行きかうことがないが防空壕の中では一緒に集まった。それで数年後に九姑(方令孺を指す)が私に言った。「私達も『患難之交(艱難を共にした友)』になったわね！」

⑭趙太侔(1889-1968)は現代劇教育家で文革時に迫害されて投身自殺。

俞珊(1908-1968)は女優・劇作家。文革時に江青により迫害され獄中死。

朱双雲(1889-1942)は劇作家、演劇研究科。田禽は演劇研究者、評論家。

そうなのだ、艱難の中での友情は最も貴重なものだ。あの時みんなの生活は良くはなかった。だが互いに助け合い互いに慰めることができた。私が病気の時には九姑

はとても私をいたわってくれた。仕事の上でも大きく助けてくれた。余暇の時間を利用して私が編集主幹をしていた『中西文芸叢書』のためにゴーリキーの小説『時計』の翻訳をしてくれた。

私と同じときに病で寝ついてしまった劇作家朱双雲は、肺結核を治すための良い治療が受けられなくて亡くなってしまった。臨終の時に彼は私に娘のことを託し、彼女が学業を終えるまで助けてくれるようにと言い、私はそれを実行した。彼の家には葬儀の費用がなかったので私は重慶の文芸界で募金を集めてお棺を用意した。その悲惨な光景は見るに忍びなかった。

あのころ私は印税に頼って生活していたが、印税はスズメの涙ほどで、生活を維持するためには物を売らなければ足りなかった。あるとき、熱を下げる肺病の輸入薬を買うため、私は心から愛しているバイオリンを委託販売の店に持っていった。

私は音楽家ではないが音楽が心底好きで、苦しんで悶々としているときにはよくハーモニカを吹き、バイオリンを弾いた。音楽も文章構想に役立つ。だから私にはそれが必要なのだ。

私はそれを売ったこと後悔した。一晩考えて、翌日朝早く、委託販売の店に行ってバイオリンを取り戻して帰ろうと思った。ところがなんと、店のショーウィンドーの中のバイオリンがなくなっていたのが一目でわかった。私の心の弦が一瞬で切れた。

私が店主に尋ねると、店主はすでに売れたと言って、その場で金をくれた。私は店主に取り戻してくれるようにと、買い手の名前と住所を問い合わせるようにと懇願したが、だめだった。

私は泣きながら『売琴（バイオリンを売る）』という散文を書いて重慶の『新民報』^⑤に発表し、生活の苦しさを訴え自分の無能を責めた。この小さな文の反響は小さくはなかった。すぐにある人が手紙を書いて私にバイオリンを贈りたいと申し出てくれたが丁寧にお断わりし、すでに興味を失った、と言った。

最も慰めになったのはバイオリンの買い手が自ら私を訪ねてきたことだった。彼は復旦大学の学生で、私の文に感動して原物「帰趙^⑥」をしたかったと言ったのだ。私は彼の善意に感動した。彼がバイオリンの愛好者だと知り、私のバイオリンを手に入れているのを見て、何でもいいから一曲引いてくれないかとお願ひした。すると彼の腕前のほうが私よりは優れていることがわかり、バイオリンはそこにあるべきだと思い、買い戻そうと思っていた考えを喜んで捨てた。それを見てかえって若者のほうが不安そうであった。

応雲衛と程夢蓮夫妻が私の文を読んで、重慶で薬を買って郵送し、体を大事にするようにと言ってくれた。これは、苦難の中にあって人々はこれほど人を思いやることができるのだ、ということを示している！ もちろん、他人の不幸を見てそばでにやにや笑っているフクロウのような紳士も何人かは知っているが。

私は北碚に四年間住み 1943 年の秋に重慶に移った。沈櫻はこの時すでに北碚の対岸、黄桷桮(ホアンジュエヤー)にある復旦大学に移っていた。文姉さんは結婚後も重慶に異動になって仕事をし、親しい友人たちもすでに散り散りになった。

43 年後の今日はさらに「故雨凋落（雨に降られた花や葉がしぼむ）」で、すでに亡き人もあり、遥か海のかなたにいる人もいる。昔を思い起こせばまるで夢のごとく、感慨で胸がいっぱいになる！

詩に曰く「人有悲歎離合、月有陽晴圓缺、此事古難全^⑰」。嘆いても空しいばかりだ！しかし、北碚が無傷で解放後は新しく建設され、その変貌はめざましいということを知り、喜んでいて、きっと景色にも趣が増していることだろう。再び旧地を訪れたとしたら、ひょっとしてそれとはわからないかもしれない！

1982 年正月 22 日

⑮『新民報』……1929 年 9 月に南京で創刊された新聞。その後重慶、成都、上海、北京でも発行された。現在は『新民晩報』と改称され継続発行されている。

⑯帰趙（原物帰趙）……「史記」に由来する四字成語、原物を完全なかたちでもどす、という意。ここでは趙(清閣)にもどす、という意味を掛けてある。

⑰人有悲歎離合……宋代の丙辰年（1076 年）の中秋節に、蘇東坡が詠んだとされる詩。「人には悲しみや喜び、別れやめぐりあいがあり。月には満ち欠けがありくもった時や晴れた時がある。これは昔から定まっていることで完全無欠なものはこの世には存在しない」、という意。

青島大学で聴講生であった江青を指導したことがあり、文革時にはそのことが原因で、下放させられた。江青は自分の過去の醜聞を知っている者をすべてこのときに抹殺しようと図った。

□□□□□